

## 第12回大崎市総合教育会議 会議録

1 開催日時 令和7年11月18日(火) 13時00分～14時20分

2 開催場所 大崎市役所本庁舎4階 災害対策本部室

### 3 参加者

#### (1) 構成員

大崎市長 伊藤康志  
教育委員会 教育長 熊野充利  
教育長職務代理者 青沼陽一  
教育委員 佐藤寛  
教育委員 堀智恵子  
教育委員 早坂正年  
教育委員 伊藤亜希

#### (2) 担当課

教育部：部長 伊藤文子，参事 菅原栄治，参事兼教育総務課長 平地久悦，  
参事兼生涯学習課長 中川早苗，参事兼地域交流センター長 早坂浩治，  
学校教育課長 新堀秀一，文化財課長 高橋誠明，学校教育課副参事 千葉弘昭，  
教育総務課長補佐 菊池勝行，学校教育課長補佐 藤木慶，生涯学習課長補佐 佐藤健，  
学校教育課指導主事 吉岡英美，学校教育課指導主事 木村丈弘，  
学校教育課指導主事 本宮千佳

市民協働推進部：部長 藤島善光，まちづくり推進課長 佐藤健一，参事兼政策課長 相澤純，  
政策課長補佐 菅井和香，政策課主幹兼係長 操一博，政策課主事 門脇美月

#### (3) 傍聴者3名

### 4 審議

協議事項

第1号 学力向上に向けた「NEXT GIGA」構想について

報告事項

第1号 本市におけるコミュニティ・スクールの今後の展開について

### 5 会議資料

別添のとおり

### 6 会議の概要

- ・事務局の進行により開会
- ・市長から開会のあいさつ
- ・市長が座長となり会議を進行

協議事項

第1号 学力向上に向けた「NEXT GIGA」構想について(資料1)

○市長：委員の皆様からご意見、ご感想なども含めてご発言いただきたい。

- 青沼教育長職務代理者**：学力向上のグランドデザインは、教育長のもと教育委員会で検討・推進してきたものであり、学校・地域・家庭の三者が不可欠である。11月1日の「教育の日」に、シンポジウムが開催され、学校・地域・家庭それぞれのウエイトについて意見を述べてきた。学校の教える機能、役割としてのウエイトが大きいことは理解できる一方で、学校に負担が偏り過ぎている現状があり、地域や家庭をどう位置付けるかが重要である。学校だけでは解決できないためグランドデザインを策定しており、地域や家庭が重要である。学校では各種の手だてや資料記載の取組を行っているが、それだけでは限界があるとの認識から提言している。家庭は自由度が高いがゆえに、教育のベクトルが各家庭でばらつきやすい。学力向上の方向性を示さなければ充実しにくいことが現状課題である。地域課題として、10年前と比較して地域の教育力やコミュニティが弱まってきていると感じる。古川北小学校学区では地域の力が残っていると感じ、心強く思った。古川第三小学校学区では薄れている印象があり、教員からも対応の難しさを聞いた。家庭で何をさせるかについて、子どもに将来必要な力を考えると、私は辛抱強さや我慢する経験、最低限の家庭でのしつけが重要であると考えており、これが欠けるとグランドデザインが形骸化する懸念がある。家庭教育を土台として、その上に学力向上が乗るべきである。必要に応じて、保護者に本音で働きかける方略も求められる。皆で心一つにして辛抱強い子を育てることを、グランドデザインの下支えとして位置付ける必要がある。ICT整備への感謝はあるが、ICTに偏り過ぎてはいけない。資料1の3ページの「すべての子供に、学びの可能性をひらくICT環境を」は、あくまで「可能性をひらく」ためであり、学校教育の中心に置くべきではない。ICT活用は、学習に時間がかかる子どもへの支援など有効性がある一方、学習は本来「楽」ではなく、安易な方法に偏らない運用が必要である。家庭でのICT使用率が高いのは自然だが、弊害の有無も含めて検討が必要である。ICT使用率が70パーセント以上といった数値は成果ではなく、入口・手だてである。今後は、効果検証と評価、足りない点の分析を行い、改善につなげるべきである。
- 佐藤委員**：学力向上に関して、当該グランドデザインは非常に優れた内容であると評価している。学力向上や知識の習得に向けて、効率的に進められる設計になっていると受け止めている。その一方で、学力向上を進める際には、子ども一人一人の個性の尊重についても十分に配慮してほしい。知識の習得だけでなく、道徳的な考え方も育まれるよう、引き続き重視してほしい。ICT活用は学習をテンポよく進めやすい反面、急ぎすぎることのないよう、じっくり考える力を育てる視点も大切にしてほしい。
- 堀委員**：前回の総合教育会議で学力向上グランドデザインの資料を見て、大変すばらしいと感じた。1年経過し、本デザインに基づく指導の成果として、全国学力・学習状況調査の結果が前回より改善していることを評価している。統合した学校の学力について定例会で質問したところ、指導主事から学力が上がっているとの報告があり、現在進めている統廃合の取組は間違っていないと認識している。今後は1年間の取組を踏まえ、NEXT GIGAの段階に入っていくと捉えている。新しい時代・新しい方法が求められる中、働き方改革が掲げられる一方で、資料1の1ページの「専門的な資質と能力を高める研修の充実」は重要である。日々新しいことを実践するうえで、教員には探求心があり、「もっと学びたい・知りたい・より良い指導をしたい」という思いを満たせる環境づくりが教育委員会の役割の一つであり、それが働き方改革にもつながる。資料にある宮城教育大学との連携をさらに深め、資料1の2ページのよむYOMUワークシートの活用、ロイノート活用の活用、タブレットドリルやAIドリルの活用の3点について、他のどこでもない大崎のために市の教育方針と学力向上に合致した形で、先生方の研修も充実させていただきたい。

そうした学びが不足すると、何かに振り回されているように感じ、自分がどこに立ち、何を目指しているのか見えにくくなる懸念がある。学校の垣根や小中学校の区分を越え、教科ごとに市内の教員が共に学ぶ時間を設けることが重要である。孤独化や1人での奮闘が苦しくなる時代において、共に学んだ経験が教員の心の活力になる。ICTはあくまで道具であり、十分に活用していくためにも、研修等で学びが担保されていれば、安心して子どもたちに指導できる。家庭教育について、資料1の1ページの内容は、永続的・普遍的に重要であり、幼い子どもを育てる土台である。家庭教育の基盤が崩れると、将来子どもが大人になった際に、結果として親が悩むことにもつながり得る。日々の手ごたえが得にくく、小さく細かく積み重ねるしかない取組だからこそ、教育委員会として市内の家庭に向け、繰り返し周知して実践を促してほしい。質問なのだが、NEXT GIGAに関連し、導入から約5年が経過したタブレットの更新時期に入っているとのことだが、台数が多い中で予算面の見通しはどうか。

○伊藤教育部長：家庭教育について、規則正しい生活を送ること、またICTはあくまで道具として使うことは、決して忘れてはいけない重要な点だと再認識した。NEXT GIGAに係る財源については、小中学生分を合わせておおよそ1万台の端末更新を予定している。国・県の補助制度を活用しながら、令和8年度の実施に向けて、必要な財源確保に努めていく。

○早坂委員：午前中に子どもサミットに参加した。毎年参加しているが、年々レベルが上がっており、今年は特に顕著に向上したと感じた。発表内容には、議会答弁のような政策提言型のものも見られた。例として、ザリガニ問題を踏まえ、フランス料理・中華料理等への活用を提案し、ふるさと納税での展開を図るべき、陸羽東線の利用が少ないことを課題とし、スタンプラリー等で利用促進を図るべきなどが挙げられた。こうした提言力は、デジタル教育の成果の一つではないかと捉えている。調べる時間が圧倒的に短縮され、子どもたちはサードプレイス、第3の居場所等の概念も調べて活用するなど、情報を引き出し提案に結び付ける力がある。一方で懸念として、デジタル教育コンテンツの進化は今後さらに加速すると見込まれ、教員側が変化に追随できるかが課題である。若手教員は一定程度取り入れているが、ベテラン教員は新しい内容の習得が難しく、差が生じているように感じる。ただし、ベテラン教員の良さもあり、無理にデジタル化を進めることで学びが低下する可能性もあるため、単純に優劣で語れるものではない。今後、教員が意識的に学ぶ場所・時間の確保が必要であり、デジタル格差は児童生徒よりも教員側で生じ得るとの認識から、是正のための講習・研修の充実が必要だと考える。NEXT GIGA構想で目指す方向として、デジタルを増やすことにより、逆にアナログの時間、体験の時間を増やすことが重要である。子どもたちの思考・調査が速くなっているからこそ、提言を実践に移す時間、すなわち見て・触って・学ぶ体験活動の時間を確保していく必要がある。NEXT GIGAでは学力向上に取り組みつつも、読み・書き・そろばんに留まらず、外に出て体験する時間が生まれるよう設計することで、よりバランスの良い学びにつながる。デジタルで効率よく机上学習を進めること自体が目的ではなく、効率化によって生み出された時間を活用して生徒が外へ飛び出し、自分たちの考えに基づき挑戦できる教育へつながることが望ましい。

○千葉学校教育課副参事：子どもたちは様々なICTを活用しており、大人より詳しい面もある。教員の中には、ICTを一生懸命活用する教員がいる一方、苦手意識を持つ教員もいるという現状認識がある。教育委員会でも研修会を実施しており、現状はICTが得意な教員や担当教員が研修に参加し、校内へ展開する方式を基本としている。今後は、例えば苦手意識を持つ教員を対象とした研修会を開催するなど、対象を明確にした研修の在り方も必要ではないかと感じたところであ

る。ICT活用により生み出された時間を、子どもたちの学びにつながるより効果的な時間の使い方にしていけるよう、学校と連携しながら取組を深めていきたい。

○伊藤委員：教育委員2年目であるが、子どもたちには10年以上関わっており、これまで主に小規模校を見てきた。教育委員となってからは、大規模校や統廃合後の学校も視察している。現在はICT普及が進み、学校現場としてはようやく慣れてきた段階ではないかと感じながら視察している。子どもたちは家庭内外でタブレットやスマートフォンに慣れており、入力等はスムーズだが、教育現場でICTがうまく機能しているかは、視察だけでは判断しにくいと感じる。まだ十分な結果が見えていない。成果を点数で把握できるのか、また学校として何を最も大切にすべきか、点数が取ればよいのか等について疑問がある。課題として、子どもたちの体力低下が非常に気になっている。室内遊びが増え、タブレットで情報は得られても、体を動かす経験が十分確保できているのか懸念がある。教員は多忙であり、子どもたちと一緒に遊ぶなど、子どもと関わる時間が確保できているかも気がかりである。学校視察では授業場面のみを見ることが多く、休み時間等に子どもたちがどのように過ごし、教員がどのように関わっているかが見えにくい。可能であれば、視察の際に休み時間の雰囲気も見られると理解が深まる。ICT活用により時間が生まれているのであれば、その時間を活かし、教員が子どもと接する時間を増やすことや、どのように接するとよいかの工夫についても共有・助言があるとよい。学力向上グランドデザインに「家庭での規則正しい生活づくり」とあるが、本来は当たり前のことであり、そこを明記しなければならない家庭が多いから記載されているのではないかと受け止めている。将来的には、そうした事項が特記されない、当たり前として定着したデザインになっていくことを望む。

○熊野教育長：学力向上のグランドデザインは、教育委員会内でさまざまな議論を重ねて作成してきたものであり、NEXT GIGAに向けても次の対応を議論しながら組み立てている。体力向上については、ウェブ縄跳び大会や持久力を高めるマラソン等、各校が創意工夫しながらチャレンジしている。一方で、インフルエンザの罹患率が高く学級閉鎖が発生しているほか、コロナも散発的に見られるなど、学校は社会的影響を直接受けている現状がある。家庭教育に関する文言が不要になることが理想だと考えつつも、社会の大きな変化が家庭にも及び、家庭の在り方そのものについて問題意識を持っている。例えば、朝食を一緒に食べる家庭がどの程度あるのか疑問に感じるほど、個々が忙しさの中で別々に食事をとるなど、団らんの機会が減っている可能性がある。これまでメディアコントロールを掲げ、教育委員会として家庭への発信を行い、のぼり旗を全校の目につく場所へ設置するなど、意識啓発に取り組んできた。こうした状況を踏まえ、家庭の大切さ、家庭教育の重要性を基盤に、今後の教育を考えていく必要があると強く感じている。GIGAスクール構想は重要だが、ICTだけに頼るのではなく、大崎市独自の学びをつないでいくあり方として構想を組み立て、子どもたちの学ぶ喜びにつなげたい。機器導入にとどまらず、学習用ノートを活用等も取り入れていくことが望ましい。学びの行動要素である読む・書く・話す・聞くの4領域を軸に、その手段の一つとしてICTを効果的に組み入れるという整理が重要である。ICTにより気付きが得られたり、調べる時間を短縮できたりする一方で、土に触れる、野外の生物に触れる、直接観察する等の実体験の重要性は教育内容として極めて大切である。研修の充実の意見も踏まえ、単に機器の理解やアプリ操作を学ぶ研修だけでなく、今何を教えようとしているのか、子どもと何を共有し、次にどう結びつけるかといった点を教員同士で共に学び、教員自身も成長していく研修が今後必要である。子どもが元気になることが一番だが、そのためには教員が元気に、授業での工夫や成功を子どもと共有し、学びの喜びを共に味わえる状態が理想である。

NEXT GIGA 構想に向けては、機器更新等が必要となる。予算編成上厳しい時代ではあるが、理解を得ながら進め、学校と教育委員会が一体となって、喜びのある学びの中で子どもたちが成長することを願っている。

○伊藤市長：他に意見はないか。

○青沼教育長職務代理者：多額の予算を投じて取り組んでいる以上、全体として学力が上がった、上がらないという大枠の評価だけでなく、ソフト代等、個別に予算措置している各施策ごとに、内部評価でもよいので評価・検証を確実に行ってほしい。ICT を使っていること自体が目的になってはいけない。使用率が高いことを成果と捉えるべきではない。子どもたちはスマートフォン等に慣れており、家庭学習でもノートよりタブレットを選びやすい現状がある。保護者の中には、タブレットで勉強しているから大丈夫と捉える場合もあり得るため、その認識に流されないよう注意が必要である。

○伊藤市長：委員皆様方からご意見を頂戴した。現場の教員は、総合的に子どもを育む役割に加え、デジタル教育では子どもに追い越されないよう対応する必要もあり、負担が大きいと感じる。期待も大きいことから、学校全体・教育委員会全体で支え合いながら進めてほしい。先日台湾を訪問し、日本の小中学校における偉人教育には限りがあるのではないかと自問する機会となった。台湾では、八田與一氏、磯田謙雄氏が日本人の偉人として尊敬され、教科書にも掲載されている一方、日本では名前を知らない人も多いのが現状であり、世界で評価されている人物を日本人がどれだけ知っているのかという問題意識を持った。磯田謙雄氏はかんがい事業の難航時にサイホン事業を推進し、八田與一氏は烏山頭ダム建設を主導した。台湾では記念公園や銅像があり、命日には感謝の行事が行われている。石川県の修学旅行では現地を訪れる例がある。併せて、東郷平八郎氏についても、イギリスでは世界的英雄として評価される一方、日本では記憶が薄れつつある可能性があると感じた。世界に情報や知識が広がることは望ましいが、同時に自分の足場の郷土や歴史に気付き、誇りに思うことが大切である。子どもサミットでわらじ村長の話が出た。鹿島台では銅像や祭り等を通じて身近な存在になっている。鳴子ダムの湧水が全国で話題となったが、鳴子ダム建設に関わった人物である当時の町長・高橋清治郎氏の銅像の存在を大崎市民がどの程度知っているか、また子どもたちが学んでいるかについて問題意識がある。銅像が道路に背を向けているように見えるのは、ダムの方向を向いているためであるとの説明がテレビ番組で紹介された。鹿島台の鎌田三之助氏は学校に銅像がある一方、高橋清治郎氏の銅像がある場所は旧道化し通行が減ったことで忘れられないか懸念がある。田尻には只野直三郎氏の胸像があるほか、吉野作造記念館には全国から来訪があり、評価されている。こうした人物や地域資産について、子どもたちが歴史・社会・海外からの評価も含めて学び、誇りを持ち、将来の目標像につながるような偉人教育が望ましい。子どもサミットの発表を受け、鎌田三之助氏の名前にとどまった点はやや寂しく感じた。会議等でも話題にし、教科書・副読本・社会科や歴史学習での教員資料など、手法は問わず、大崎に全国的評価を受ける人物が多くいることを子どもたちの誇りにつなげてほしい。世界農業遺産やかんがい施設遺産等、先人の苦労が世界に認められたことが、子どもたちがふるさとを再認識・再発見し、関心を高めるきっかけになっていると考える。委員皆様方からご意見を頂戴した。本日いただいたご意見を十分参考にし、本議案について、進めさせていただくことで決定することに異議はないか。

(了となる。)

## 報告事項

第1号 本市におけるコミュニティ・スクールの今後の展開について（資料2）

○**青沼教育長職務代理者**：コミュニティ・スクールは、すでに協働教育として約15年前から開始している。大崎市は「協働のまちづくり」を掲げているが、「協働」という言葉自体の難しさを感じている。現在は学校教育課が担当しているが、私が生涯学習課在籍時に同分野を担当していた経験がある。学校運営委員会を作ったこと自体が目的ではない。制度の下支えとなる部分を大切にしてほしい。推進の基本には学校応援団の考え方が必要で、これがないと進みにくい。「学校を核とした」という表現について、学校に来ないからよいという意味ではない。学校を核にするのは入口としての設定であり、そこから地域へと広げていく必要がある。そのエナジーは、地域の応援が不可欠である。下支えとしての学校応援団は各校に存在しているため、それを基盤に進めてほしい。説明にあった三本木で実践したい内容は、清滝小学校時代に防災を切り口として地域と既に取り組んでいた経緯があり、素地はあったが、現在はややぼやけてきている印象がある。地域性について、古川北小学校ではまだ残っていたが、古川中心部では薄れつつあり、地域の状況により進め方を変える必要がある。松山にも学校支援本部があり、過去に熱心に取り組んだ時代があるため、そうした蓄積を掘り起こしながら進めてほしい。教育委員会には指導主事が3人、学校の校長経験者が4～5人、教育長もいる。NEXT GIGA 構想やコミュニティ・スクールをテーマに、フリートーク形式でもよいので話し合いの場を設け、ここは少し違う、ここは難しいといった率直な意見交換を力にして取り組んでほしい。自分の担当と関係ないという線引きではなく、マンパワーをうまく活用して推進してほしい。

○**千葉学校教育課副参事**：三本木地域の取組は、生涯学習課とも連携しながら進めてきた。学校応援団や地域と学校をつなぐ会等に対しても、これまで説明を行いながら取組を進めている。今後、他地域へ展開していくにあたって、地域の方々の理解が極めて重要である。そのため、可能な限り関係場所にも直接足を運び、丁寧に説明を行い、理解を得ながら進めていきたい。

○**熊野教育長**：教育委員会の知の集積を、今後、さらに議論を深めて取り組んでいきたい。地域協働本部事業は各学校で機能している。地域協働本部事業の主体は生涯学習課、学校運営協議会をその上に整備しつつ、地域協働本部事業の運営のために結集する運営は学校教育課という二面性を重ねて持っており、これがコミュニティ・スクールの真の姿である。これまでも各小中学校には、地域のボランティア等が多数入り、さまざまな協力を得ている。今後は、そうした人材に学校へより機能的に関わってもらうことで、地域と学校がより協働し、連携の取れたシステムを構築したいという願いがある。そのためには一定の時間を要するが、学校側の基盤づくりがないままでは、運営委員会を形だけ作って終わりということになりかねない。各地域で実のある取組と協力体制を築けるよう、準備を進めていく。

○**伊藤市長**：他に意見はないか。その他として、教育委員の皆様にはスクールバスの運行等のクマ対策について報告しているか。

○**千葉学校教育課副参事**：既に報告済みである。

○**伊藤市長**：鳴子温泉地域から東側に移動してきているようだ。クマは1日に30キロメートルから50キロメートル移動するとの情報も踏まえ、全市的・全庁的に対策を講じたい。特に子どもたちの安全対策については、しっかりと連携して取り組んでまいりたい。インフルエンザについて、何か警鐘を鳴らしていただくことはないか。

○**佐藤委員**：ここ2週間ほどでインフルエンザに罹患する子どもや市民が増加している。校医とし

て携わる学校でも、昨日、学級閉鎖に関する相談があった。インフルエンザ患者が多い一方で、コロナ患者も連日発生している。先日の連休中には、休日当番医が100人以上を診察する状況だったと聞いている。感染予防や学校における学級閉鎖等の判断については、相談しながら対応している。ワクチン接種希望者も増えているが、ワクチンは現時点では確保できている。マスクの在庫も現状はあるが、急に不足する可能性があり、薬剤についても入荷が不安定となる場合がある。引き続き、マスク着用を含む基本的な手洗い、うがい等の感染対策を折に触れて周知している。

- 堀委員：先ほどクマ対策の話があったが、市街地でも柿の木に実が残っている状況が見られる。クマを誘引する要因にもなり得るため、実を落とす、伐採する等の対応について、公の場から市民に促すことは可能か。報道では秋田県で柿の木に登った熊が長時間居座った事例もあり、所有者が不明で伐採できないケースがあるという。市内にも同様の樹木が多数ある可能性があり、所有者の自発的対応を促したいが、高齢等により作業が難しい場合もある。市として声掛けを行える形があればよい。
- 藤島市民協働推進部長：冒頭の市長の話にもあったように、国がクマ対策のパッケージを示しており、その中には柿の木の伐採等も含まれている。国の動向を注視しつつ、各総合支所とも連携し、可能な限り市民への呼びかけ等を進めたい。仙台市では、消防職員が勤務間の休日を活用し、ボランティアで柿の木の伐採支援を行っている事例が報道されている。大崎広域の消防にも話題提供をしているが、今後連携を図りながら進めてまいりたい。
- 青沼教育長職務代理者：総合教育会議の出席者について、今日の議題に沿った関係課の出席になっていると思うが、予算とも関係してくると思うので、検討いただきたい。
- 藤島市民協働推進部長：出席者については、今いただいたご意見を今後庁内で検討し、対応してまいりたい。
- 伊藤市長：他に質問、意見はないか。  
(質問、意見なし。)

## 8 閉会

熊野教育長から閉会のあいさつ

以 上